

潮

流

雪の言葉(上)

カメムシは知っていた



大友 義助

挿絵：佐藤四郎太

しいものである。ある人(同じ人かもしれない)が減反せよと言いつつ、同時に食糧の国内自給率を上げよとも言つ。凡人にはなかなか理解しにくい難事である。

昨春秋、大発生したカメムシたちは、今年大雪になるだろうと知っていた。湿った重い雪が何日も止まずに降るだろう。もしかすると、黄砂も大量に降るかも知れない、と彼等は口々に言っていた。

カマキリもミノムシもこれを知っていた節がある。彼等はいつもよりも一段と高いところに卵を生み、巣をかけていた。

しかし、中央気象台はそうは言わなかった。今年はずっと暖冬になるだろうと言っていた。それで雪も少ないだろうと早合点した小生は愚かであった。雪囲いもろくにしなかったため、植木は折れるやら、軒端の垂木も折れそうである。

ともかく、今年は大雪である。雪の重みで、米沢では、しにせの料亭や古い機関庫が倒壊している。新庄や南陽では、余りの積雪に、自動車が進んで汽船道に入ってしまったらしい。

私たちは自然を余りにも甘くみているのかも知れない。大雪を知らせてくれるカメムシの忠告にも耳をかさなかったのは、不注意というよりほかにない。昔の人はこうした予兆

にはまことに敏感であった。雲の動き、空の色、高山に残った雪の形、木々の芽吹きや紅葉の様子を微細に観察し、そこから得られた経験則を積み重ねて、予兆とし、諺として、季節の少しの動きをも逃さず、田畑を耕し、種を蒔き、苗を植えてきた。当たるとせよ、当たらずにせよ、予兆や諺を重視してきたのはこのためであったのかも知れない。この心構えがいまは失われている。

先ごろ、村の人に「寒前かんまえ、土用後ついで」という諺のあることを聞いた。雪の降り方は年によって違う。ある年は、寒の季節に入る前、つまり年の暮れないし正月早々にどかっと降り、ある年は、冬の土用が過ぎてからどかっと降り、という意味だそう。調べてみたら今年の冬の土用は一月十七日。とすれば、今年の雪の降り方は、まさに「寒前」の典型であった。だからもう安心、とも行かないものらしい。雪というものは、一筋縄では捉えられない、まことに厄介なものである。まあ、用心に越すことはない。

大雪の年は豊作だそう。それでも、豊作では困るという人もあるから、世の中なかなか難

雪の中で生きて行くには、ときとして極度の慎重さを必要とする。甚だしい地吹雪の最中、雪の原を越して隣村に行かねばならぬときなどはその例である。一面の雪原を最上地方では「はでやら」という。烈風は四方八方から吹き募つて、表面の粉のような雪を舞い上げ、立っているものすべてを、下から上まで真っ白にしてしまう。まるで、白い粉をまぶしたように真っ白にしてしまう。これを最上地方では「白粉まぶれ」という。地吹雪のとき、「はでやら」をこいで来る人は、みんな、「白粉まぶれ」になる。



土間でわら打ち



吹雪の中を集団登校

地吹雪は前に歩いて行った人の足跡を一瞬にして消し、真つ平（たつひら）にしてしまう。冷たい烈風は針のように顔に突き刺さってくるので、顔を上げることができない。できたにしても、天も地ももうもうたる雪煙りで、あたりはまるで夜のように暗くなり、西も東もわからなくなる。

人が道を失い、際限もなく「はでやら」をこぎ回り、ついに凍死してしまうのはこんな時である。これを最上地方では「吹雪（ふぶき）どりに逢つ」という。「吹雪どり」はまことに恐ろしい。小生も一度ならずひやっとしたことがあるが、こんなときはすぐ目の前にある電灯の明かりも見えなくなる。不安の余り、夢中で「はでやら」に踏みこみ勝ちである。だが、道を一步踏み違えて、「はでやら」に足を入れたら事である。ずぶずぶ腰までぬかる雪原をあわててこぎ歩くことになる。しかし、いくら歩いても目的地には到着しない。吹雪にまかれ、疲労困ぱいの末、雪の原に倒れてしまつた。翌朝、捜し当ててみると、彼が歩いたのは

せいぜい直径五〇〇位のところをただぐるぐる回っていたに過ぎないことを発見して驚く。人の歩幅は左右の足で多少違うので、目標もなく進むと、自然、その足跡は丸くなるのだそつだ。「吹雪どりに逢つ」ころは、人はそれこそ「白粉まぶれ」になっている。新庄あたりでは、のし餅を焼き、湯にくぐりして黄粉をまぶした餅を「吹雪どり餅」といって、おやつにしているが、まことにびつたりの名である。「吹雪どり」に逢わずに命を全うするには、どうすればよいか。それは前に歩いた人の道を踏み外さないことである。地吹雪で足跡が完全に消されるとは言え、前の人を踏んだ箇所は確かに「はでやら」と違つて固い筈である。これを足裏で一步一步確かめてから慎重に歩を運ぶのである。「あこつり道」は馬の背道のように歩きにくい、そこだけが固くなっているのが救いである。前人の足跡を一步一步慎重に確めて歩を運ぶ。これが吹雪どり」から逃れる唯一の道である。

恐ろしいのは不意の雪崩である。雪崩のつく箇所はほぼ決まっているのであるが、時として、これまで全然つかなかったところにもつくから油断できない。山登りのベテランから聞いたことであるが、彼は急な雪の斜面を下するとき、まず捜すのはカモシカの足跡だそつだ。少々回り道でも、この方がずっと安全だといふのである。彼らは雪崩のつきそうなどころでは大きな音を出さないようにしているともいふ。

数日來の地吹雪がぴたりと止んで、翌朝は一面の銀世界。広い雪原が昇る朝日にまばゆく輝く。こんなときである。庄内地方の山手の雪原に大小の雪の塊が俵のような形で、ころんころんころんがっている不思議な光景を目にするのは、小さな雪の塊が烈風に押しまくられて回転しているうちに、徐々に成長して、米俵のように大きくなるのだそつだ。土地の人々は、これを「雪俵」と呼び、豊作の瑞兆（ずいしやう）として喜ぶ。



カヤぶき屋根の雪下ろし

大友 義助

1929年 東根市出身、1953年 山形大学教育学部卒業、1989年 県立新庄南高校校長、新庄市史編纂室勤務を経て、現在、新庄「雪の里情報館」館長。

新庄民話の会会長、県文化財保護審議会会長、山形県史編集委員。

(主な著書)

「新庄の昔ばなし」「山形県最上地方の伝説」

「新庄市史 第二巻・第三巻」

CD「やまがたの方言」ほか多数

(雪の里情報館)

996-0086 新庄市石川町4-15

http://www.ic-net.or.jp/home/shinjo/